

ねらい 決算整理事項である売上原価算定方法を学習する。

決算整理仕訳が必要なのは、有価証券(株式)などを保有している場合だけではありません。売上原価の算定の仕訳というも行わなければなりません。まずは、次の2例を比較してみましょう。

A社では、1個50円で仕入れた商品を100円で販売しています。
B社では、1個50円で仕入れた商品を150円で販売しています。
今期、一年間での仕入れと販売の金額をまとめると以下の表のようになりました。

	期中仕入個数	仕入金額	販売個数	売上	在庫	売上 - 仕入
A社	200個	10,000円	200個	20,000円	0個	10,000円
B社	500個	25,000円	200個	30,000円	300個	5,000円

この場合A社とB社どちらが儲かっているのでしょうか？“売上 - 仕入”を見てみると、A社では10,000円のプラスが発生しており、B社では5,000円しか発生していません。そうするとA社のほうが儲かっているのでしょうか？

50円で仕入れた商品を（同じ数だけ販売したならば）150円で販売しているB社の方が儲かっているのは、感覚的にも解ると思います。では何故利益がB社のほうが数字が小さいのでしょうか？それは、在庫（仕入れてまだ販売していない商品）があるからです。翌期以降、A社では仕入れた商品を全て売っているので、これ以上販売しようとする、また商品を仕入れなければなりません。一方B社では、商品の在庫があるので、仕入れをしなくても販売することができるのです。

ですからB社の場合、決算時に商品が残っている場合には、売れ残っている商品300個分をなんらかの形で処理しないとイケないのです。この処理が、売上原価算定の決算整理事項となるのです。では、どのように処理するのでしょうか？まずは、次のように考えて下さい。

もしB社が、A社と同じく200個しか商品を仕入れなかったとしてみましょ。そうすると、B社には300個分の仕入れ代金15,000円(300個×50円)が現金として残っているでしょう。実際には、商品として仕入れてしまっていますが、その残っている商品は15,000円分の価値のあるものと考えられます。つまり、お金の価値があるもの(資産)と解釈して、決算時には、売れ残っている商品は貸借対照表の資産項目として扱うのです。

上記の説明より、売上原価とは、売上の上がった金額に対しての仕入原価であると考えれば解りやすいと思います。ですから、B社の売上原価は、販売した商品の原価として計算しますので200個分販売していますので、 $200 \times 50 = 10000$ が売上原価になります。また期末の商品残高（ここでは15,000円〔300個×50円〕）のことを期末棚卸高といいます。

売上原価算定方法

売上原価の算定では、次の式が成り立ちます。

$$\text{売上原価} = \text{当期仕入高} - \text{期末商品}$$

会社では、期首に前期より引き継いだ商品がある場合がほとんどです。期首に在庫があった場合の売上原価はどうなるでしょう？

例えば、B社が下記の状態だったとしましょう。（商品は全て1個100円とします。）

	期首個数	期中仕入個数	期末在庫	販売個数
個数	50個	500個	300個	250個

この場合、期首に商品が50個あり、期中に500個仕入れて、期末の在庫が300個です。期中に250個販売されたのがわかると思います。売上原価とは、売上が上がった分の金額ですので、 $100 \times 250 = 25,000$ 円となります。

つまり、期首に在庫がある場合は、その分と当期仕入分を加えて、期末商品を引けばいいのです。そうすると、次の式が成り立ちます。

$$\text{売上原価} = \text{期首商品} + \text{当期仕入高} - \text{期末商品}$$

例1 期首に商品が500円あり当期に商品を1,000円仕入れた。

期末残高を確認すると商品が200円残っていた。

この場合の売上原価を求めよ。

$$\text{売上原価} (1300) = \text{期首金額} (500) + \text{仕入金額} (1000) - \text{残っている商品} (200)$$

しかし、簿記ではすべての取引を仕訳で記録しますので、このような計算も仕訳をする必要があります。この方法を次の「本科講座23」で学習します。